

目 指 す 学 校 像	S S H指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
-------------	--

重 点 目 標	1 S S H指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
---------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学 校 自 己 評 価								学 校 関 係 者 評 価	
年 度 目 標					年 度 評 価			実施日令和 年 月 日	
番 号	現 状 と 課 題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	<現状> ○今年度、S S H 1 期目最終年度となる。課題研究については、テーマ設定までに掛かる時間の短縮を図り、生徒に考えさせる指導を強化してきた。生徒の探究意欲が向上し、課題解決能力の向上に繋がっている。S S H関連行事は、生徒に浸透してきており、さくらサイエンスプランでは、相手国参加生徒の、本校取組についての評価が非常に高く、本校生徒にとっても充実したものとなっている。 ○大学入試センター試験受験者が 301 名と学年の 9 割を超え、大学進学、一般受験の傾向が定着している。一方で 5 教科受験者は 64 名でセンター受験者の 2 割にとどまり、現役国公立大学合格者が 25 名と、前年と比べて微減した。背景には、志望校・学部・学科を考える際に挑戦するより確実に進路を決めたいという生徒・保護者の安全・安定志向がある。令和3年度からの新大学入試を迎え、受験をはじめとした進路に関する情報量において、教職員間に差が見られる。 <課題> ○S S H 2 期目の指定と、次期学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究型授業の構築が大きな課題である。S S H推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸となった対応が必要である。研究指定となる「さいたま S T E A M S 教育」も積極的に推進する。 ○生徒が明確な高い「志」を抱き主体性を持って挑戦し学ぶ姿勢を育むと共に、それを実現できる環境整備に努める。全教職員が情報を共有できる環境を作り新入試の準備を行い、担任・副担任が生徒・保護者へ正確な情報提供を行えるように協力する。 ○総合型選抜・学校推薦型選抜定員増への対応を進める。 ○新型コロナウイルス感染予防のため、教育活動の制限、進路行事等の見直し、実施方法変更を求められる環境下において、状況に合わせた対応が必要である。	SSH 校としての取り組み	① SSH 指定 4 年間の取り組みを客観的に評価し、SSH 行事、数理探究などが生徒及び教員にどのような変容をもたらすことができたのかを評価していく。 ② SSH 指定 2 期目に向けて学校全体のコンセンサスを取り、具体的な目標と方向性を整理し学校全体で共有できる環境を構築する。	① 過去 4 年間に行われてきた様々な評価を分析、さらに在校生、卒業生および教員などから SSH の取り組みについて調査を実施。得られた結果を詳細に分析し評価を行うことができたか。 ② 本校の SSH の取り組みは数理探究および S S 科学総合を中心に多くの教員から協力をいただくことができたか。積極的に意見を交換できる環境を実際に構築していくことができたか。					
		高い「志」の育成と進路実現	① 生徒の「志」を高めるため、各学年・教科・進路指導部による組織的・計画的なキャリア教育を実施する。 ② 学年団と協力して、保護者に対しても進路情報を発信する。 ③ 卒業後の具体的な進路目標を早期に意識づけるため、進路希望調査及び個人面談を実施し、その内容を学年・進路指導部で共有して指導する。 ④ 家庭学習を習慣化し、効果的な時間管理意識を高めるため、タブレット等を活用して学習記録を付けるように指導する。 ⑤ C l a s s i ・スタディサプリ・模試復習サイトの活用を推進する。 ⑥ 補講(長期休業・後期)の積極的な参加を呼びかける。映像講座などの活用も促す。	① L H R や総合的な探究の時間等を利用して、学年に応じた進路行事を実施できたか。 ② 保護者に対して進路情報を提供できたか。 ③ 各学期 1 回の進路希望調査と、個人面談が実施できたか。生徒の進路動向を学年・進路で共有できたか。 ④ C l a s s i 等を使って学習の自己管理をした生徒が 7 割を超えたか。 ⑤ スタディサプリ視聴時間が前年度を超えたか。朝学習・宿題配信などでの活用ができたか。 ⑥ 年間で 20 講座以上の進学補習を開講できたか。					
2	<現状> ○タブレット全員利用も 4 年目となり、生徒・教員とも日常のツールとしてタブレットを利活用できている。 ○授業改善を継続し、I C T 機器を活用した主体的・対話的で深い学びの充実を進めてきた。教員研修や授業研究会により、更なる効果的な活用への模索が始まっている。 ・O S T は英語科を中心に効果的に実施してきている。 <課題> ○生徒全員タブレットをベースとした、授業支援サービスやテレビ会議システムを活用した I C T 教育の推進がさらに求められる。 ○I C T 機器を用いたアクティブラーニングの実践を蓄積し、校内の横の連携を密にした授業改善が求められる。 ○1 年生の「数理探究」における課題研究、2 年生の理数科、S S C 1.5 クラスの合同展開の課題研究の内容の充実が求められる。 ○英語 4 技能向上を目指し、英語授業で O S T 実施、G T E C スピーキングテスト継続、学校全体の連携が不可欠である。 ○入学者選抜において、昨年度の高倍率を保つべく募集事業に対する検証、改善、見直し等が必要となる。	生徒の学力向上に向けた全校で取り組む授業力の向上	① 1、2 年生の「数理探究」において、生徒が主体的に学習課題を見つけて論理的に分析し、計画的な課題解決力を身につけさせる。 ② I C T 機器をフル活用し、授業支援サービスやテレビ会議システムの導入・利活用を説教区的に進め、アクティブラーニングの実践を促進し、新しい授業・指導法の方策をいち早く取り入れる。 ③ 授業アンケートを実施し、授業改善に役立てる。 ④ 英語 4 技能向上に対して学校全体での取り組みを推進する。 ⑤ 中学校・塾への訪問を積極的に行い、きめ細かな情報交換を行う。 ⑥ 充実した学校説明会・体験授業を行い、理解を深めてもらう。 ⑦ H P やパンフレットの内容を改善し積極的に広報活動を行う。	① 数理探究の課題研究において、論理的に仮説を立て、それに基づいた研究計画が作成されたか。 班内分担や共同作業が円滑に行われ、充実した発表ができたか。 ② 授業支援ソフトやテレビ会議システムを使い、新しい形の教育を提供できたか。 ③ アンケートが実施され、授業改善に役立てられたか。 ④ O S T、G T E C が組織的かつ協力的に進められたか。 ⑤ 具体的方策を実行できたか。 ⑥ 昨年度増加した学校説明会参加者数をそれぞれ維持または増加できたか。 ⑦ 最終倍率が普通科で 1. 3 倍、理数科で 2 倍を維持または上昇したか。					
3	<現状> ○風紀委員による登校指導や、自転車点検は毎学期定期的に実施し、生徒の安全意識高揚に努めている。しかしながら、自転車の乗車マナーに関して、一部の生徒に対して地域の方からご指摘を受けているが、登下校時を含め、生徒事故ゼロで推移している。 ○教育相談・特別支援委員会を毎学期定期的に実施し、教員、S C、S S W との連携強化を図っている。 ○年度 5 回のケース会議を実施し、支援の必要な生徒に対して、組織的な対応ができている。 <課題> ○「自主」「自律」の校訓のもと多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。生徒自ら学校生活の中で主体的に判断し行動できるような活動を促進する。 ○自転車通学、交通機関利用通学ともに多くの生徒は安全に登下校をしている。年々減少している事故件数がゼロになるよう職員、生徒へ喚起を促す。 ○教育相談の件数が、年々増加しているのでカウンセラーと相談しやすい環境作りのため相談室を移転した。教育相談体制を維持、継続させることにより定着を図る。	安心、安全な高校生活	① 生徒自ら安心安全な高校生活が送れる環境作りを、風紀委員が中心となり「登下校マナーアップ運動」「駐輪マナーアップ」「挨拶運動」を行う。その活動を教職員がサポートする体制を整える。 ② 交通安全教室、携帯・インターネット安全教室を年度当初に実施し、年間を通じて生徒の意識向上を図る。	① 風紀委員、教職員による各活動が 1 年間を通して行われ、登下校、駐輪、挨拶のマナーアップが図れたか。 ② 交通安全教室を実施し、さらに事故件数が減少したか。携帯・インターネット安全教室を実施し、十分な指導ができたか。					
		教育相談との連携	① 教育相談委員会を各学期定期的に実施し、スクールカウンセラー、個別サポート指導員、特別支援コーディネーター、教職員、保護者間で情報交換を密にする。	① 教育相談委員会を各学期実施し、関係者間で情報共有をすることができたか。					
4	<現状> ○地域に根付いたアウトリーチ活動が実施できている。特に自由研究サポートプログラムは参加が 6 0 0 名を超え、昨年度比 2 割以上の増加となった。また、令和元年度新たに青少年宇宙科学館と連携した高校生ロケット教室を行い、好評を得た。 ○S 科学英語実践講座への参加生徒は昨年度より増加(約 1 3 % 増)した。参加生徒からは、グローバルな視点を持つきっかけとなった、英語での表現力が向上したという声が寄せられ、満足度が向上している。 また、令和元年度は新たに芝浦工大、東京農工大、東洋大と連携が実現した。芝浦工大に 4 9 名、東京農工大に 1 5 名、東洋大に 1 7 名を派遣した。 ○修学旅行のサイエンス研修では、シンガポール大学との交流が実現し、生徒が世界的な視野を持つことの必要性を体感する貴重な機会となった。 <課題> ○アウトリーチプログラムの取組は、ほぼ完成形を迎えていると評価できる。前例踏襲するのではなく、ニュースに即した内容を取り入れていくことが課題である。 ○サイエンス研修をはじめとする海外交流プログラムは、年々充実が図られ、本校の特色ある教育活動の柱として定着している。取組内容を一步一步確実に前進させていくことが課題である。相互交流を深め、信頼関係の構築を一層進めていくことが必要である。 ○新型コロナウイルス感染予防のため、様々な教育活動に制限が加えられている。本校生徒にどのような取り組みを提供することができるかを検討する。グローバルプログラムの補完的な活動として「エンパワーメントプログラム」も推進する。	SSH 校としてのグローバルサイエンスリーダーの育成	① 生徒の想像力、探究力および発表能力を育成するために行われてきた数理探究、生徒のサイエンスに対する興味関心を高めることを目的に実施されてきた SSH サイエンスフィールドワークなどをどのように実施していくのかを早急に考え、計画していく。	① 昨年まで行われてきた内容を早急に見直し、新しい環境に対応するための行事を計画実施することができたか。また、行われた行事などに対して生徒はどのような評価を行ったか。					
		SSH 校としての地域の理数教育拠点校としての取り組み	① さいたま市内の理数教育拠点校として、行われてきた行事を、今年度は昨年度と同じ手法で行うことは不可能である。このような状況を踏まえ、新たな手法で理数教育拠点校としての役割をどのように担っていくのかを早急に考え、計画していく。	① 地域の小学生および中学生に対してサイエンスに対する興味関心を高めるためのイベントなどを企画実行することができたか。					